

白球の残像

ピーチ

序章

「今年の夏は例年のない猛暑だ」と毎年ニュースは言うけれど、私の記憶上いまだかつて、この夏ほど「暑かった」夏はない。今でもふとした瞬間に、耳の奥にあの日の歓声と衝撃が甦ることがある。

甲子園球場に降り立ったのは、まさに夏の開会式の日。野球が大好きな祖父に連れられ、半分祖父孝行のつもり。正直そこまで乗り気じゃなかった。

高校野球。

たまに、テレビで見ることはあったけれど、のめり込むほどではなかった。

甲子園。

席につくと、球場全体がざわめき立ちつつも、これから始まる熱い闘いの前の静けさみたいなものをも感じる、そんな不思議な空間だった。私の席は、1塁側ブルペンの真横だった。そう、ここから全てが始まった。

ネット越しの景色

そこまでのり気じゃなかったとはいえ、球児たちと同じ高校生だった私は、少なからず「どんな高校が出てくるんだろう」とか「東京の代表はどこかな?」とか地方予選の間も、そんなことは気になっていた。

そんな最中、家に毎朝配達されるスポーツ新聞の1面を、とある高校生ピッチャーが飾っていた。地方予選でのノーヒットノーラン。

「巨人軍長嶋監督注目!」とか「超高校級」とか、そんな見出しだったことを覚えている。そしてなぜだかわからないが、その記事に惹かれた記憶も。

だから、、、そのピッチャーのチームの試合が、たまたま見に行くことになった甲子園の開会式の日だと知ったとき実はほんの少しだけ、楽しみにしていたのだ。

第3試合。

入道雲も夕日に消えて見えなくなりそうな、そんな日が暮れかけたスタンドを背に、静かにそのピッチャーが投球練習を始めた。

私の席の目の前だった。

私は、細かい網目のネット越しに夕陽を浴び、少し目を細めながらその姿を見ていた。

白球が手を離れたかと思った瞬間、キャッチャーのミットに吸い込まれていくほどの速球。生ぬるい空気と風をずばっと切り裂くような音と共に。

いまでも鮮明に、その光景は思い浮かべることが出来る。

「超高校級、ってこういうこと!?すごいな」と素直に感動したのを覚えている。ただ、その後の試合開始のサイレンから、試合終了のサイレンまでの間の記憶がほとんどない。マウンドから目を離すことが出来なくなっていた。

試合よりも、

淡々と、ただひたすら白球を投げ続けるその姿に、目が釘付けになっていた。

試合は、俗に言う接戦だった。

気がついたら日はほとんど暮れ、チームの敗戦を知らせるサイレンが甲子園に鳴り響いたのと同時に膝から崩れ落ち、頭を抱きかかえながら泣きじゃくるそのピッチャーを支えるチームメイトを見ながら、私もなぜか声をあげながら、泣いていた。

出会い

それから数日、私は不思議な気持ちに包まれていた。

甲子園の日差しを舐めていた私を待ち受けていたのは、真っ赤に腫れあがった肩と、無残な日焼けの痕。

ただそれよりもずっとずっとずっと、あのピッチャーのことが気になっていた。全く頭から離れず、ご飯を食べていてもテレビを見ていても、散歩をしていても、いつもどこかで彼のことを考えていた。

甲子園中継がついていると、勝ったチームのピッチャーの喜ぶ顔を見ながら「あの人にもこの顔をさせてあげたかったなあ」なんて、そんなことを考えていた。今思うと、最初は同情のような気持ちだったのかもしれない。憧れの気持ちも勿論あったけれど、、、。

実家に帰り、部活のない日は甲子園中継を見たり、花火をしたり、プールに行ったり、そんないつも通りの夏休みを送っていた。ある日、ふとした瞬間に、またあの試合のことが頭をよぎった。

あの試合をあの場所で見ただけかもしれないけれど、なんだか変わった気がした。この不思議な気持ちを伝えたくて、初めて、ファンレターなるものを送ろうと思った。

便箋を引き出しから取り出し、どの柄にしようかな、ペンは黒だよな、とかそんなことくだらないことを思い悩みつつ、何を書くか、これまた散々悩んだ。

ありがとう！もなんか違うな、とか。
感動しました！もありきたりだろうな、とか。
頑張ってください、なんてもっとありきたりだな、とか。

そんなことを考えていたらすっかり日が暮れていた。
諦めて、「どうせ、読むかもわからないし」となんだかちょっと投げやりになりながら手紙を書き、
高校の住所を調べ、ポストに投函した。
何かを期待していたわけでもないのに、少しだけドキドキしていた。

数年後、その手紙を見せてもらったことがある。

「スポーツを見て、こんなに感動したのは初めてでした。

勇気をもらいました。これからどんな道に進まれるとしても貴方らしく頑張ってください。

私は、その道を全力で応援したいと思います」と。

「全力で応援」・・・

この意味を本当に理解するのは、まだまだ先の出来事だった。

2学期も始まり、夏休み気分も薄れつつあったとある土曜日。
珍しく「塾の宿題をしようかな」なんて考えていたそのとき、ふいに携帯が鳴った。
見知らぬ番号だった。

「文化祭の手伝いについてかな～めんどくさいな～」とクラスの男子の顔を思い出しながら
1回目は出なかった。その5分後、また着信があった。
「しつこいな～」と思いつつ、とても無愛想な声で
「もしもし？」と電話に出た。

すると、電話口から聞き慣れない声。

「○○ですけど」

「??どちらの??」

「いや、学校に手紙をいただいた。甲子園の試合を見ていただいていたみたいで、、、」

「えええええええ?嘘!」

正直状況がよくつかめず、何を話したかもよく覚えていない。

ただただ、浮足立っていたことしか覚えていない。

一生分の運を使い果たした気持ちだった。

電話を切る時に心の中で「あ～神様ありがとう!」

と思って電話を切った瞬間の気持ちだけ、今でも鮮明に覚えている。

そして「ワガママを許してくれるなら、このままもっと仲良くなれますように」と、お願いした
ことも。

1回こっきりだと思っていた電話が、

いつしかメールも来るようになり、電話も週に何回もするようになった。

電話した日やメールした日は、手帳に専用のマークを描き込むのが日課になっていた。

あの日の電話を境に、私の人生が急激に変わっていく気がした。

最初こそ緊張しすぎて全くしゃべれなかったものの、

時が経つにつれ、色んな話をするようになっていった。

電話で話していると、「プロ注目」とか「超高校級」とか

そんな風に世間に言われている人だとはとてもじゃないけど、思えなかった。

色んな話をした。

学校の話、部活の話、家族の話、友達の話、
好きなマンガの話、歌手の話、、、話題が尽きることはなかった。
ただ、お互い恋愛の話だけはしなかった。
というより、私が怖くてできなかったのだ。

気がついたら、好きになっていた。
いや、きっと甲子園のマウンドで投げている姿を見た瞬間から、
私は好きになっていたんだと思う。
もしかしたら、スポーツ紙の一面を見たときからかもしれない。
けれど、アイドルを好きになるようなそんな感覚に近かった。

そんな二人が初めて会ったのは、電話で話しはじめてから4か月近く経った日だった。
ドラフト会議でプロの球団に指名されて、関東に来るのが決まり
その入団会見の日だった。

学校を早退し、足早に会場に向かう私。
良く考えたら、写真でしか私の顔は知らないはず。というか、お互い初対面だ。
この数か月、何度も「私、騙されているのかな？」と思ったし、友達にも散々諭されたけれど、
それを確かめられる日がいよいよやって来たのだ。

あまりの緊張に、足が竦んだ。

開幕

会ったら話したいこととか、聞いてみたいことが山ほどあったけれども姿を見た瞬間にすべてを忘れてしまった。

真新しいユニホームを着ている彼を見守る、誇らしげなご両親。同期入団の選手と写真におさまる姿を見かけ、少し離れたところから様子を見守っていた。

それからどれだけ時間がたっただろうか。

ふとした瞬間に、彼と目が合った。

こちらに向かって彼が歩いてくる間、全てがスローモーションだった。

こんな体験は初めてだった。

緊張で凝り固まっていた私を、彼の

「はじめまして、」「じゃないか（笑）」

という笑顔が溶かしてくれた。

今思えばこの一言が、すべての幕開けだった。

それから、どれだけ話しただろうか。

「今日は球団との食事会が」ということで別れたが、その日を境に、会える限り、会うようになった。

地元を離れ心細い彼の心と体を埋めるかのように、彼がオフの日は毎日、学校を休んで会いに行った。

あの頃の私にとって、学校や勉強や友達や、家族さえも、二の次どころか、優先順位にさえ入らなかった。

気がついたら夏から、体重が10キロ近く減っていた。

そんなある日、担任の先生に職員室に呼び出された。

あまりに欠席や早退が多いことを指摘され居た堪れなくなった私は、自己弁護のため、誰にもぶつけられなかった思いを正直に告白してしまった。すると、その先生は思いもよらぬ返事をしてくれた。

「その彼に、今のまま変わらないでいて欲しいわね。と、私は思う。悲しいけれど人は、変わってしまうから。

奢らず、焦らず、怠らず。

あなたも焦らずに、しっかり支えてあげなさい。何事からも逃げないことよ。出来る？」と。

さらに、私の奥底にしまっていた不安な気持ちを察してか、続けて

「けどね最近、急に綺麗になったと思ったのよ。いい恋愛してるってことだから、そこは安心するのよ。彼を信じてあげなさい」と。

正直、注意されるとばかり思っていた。

親に連絡がいっちゃうのかな？なんてことを心配をしていた。

だからこそ、先生の一言はより重く、深く、私の心に響いたし、沁みた。

「うん」と声も出さずに頷くので精いっぱいだった。

今思えば、人から鼓舞されて泣いたのはあの時が最初で最後だったかもしれない。

次第に同僚や先輩との人間関係を築き始め、
夜な夜な飲み歩き、彼なりの生活リズムが出来上がっていった。
酔っ払った彼から深夜に電話が来ることも、珍しくなくなった。
そんな電話でも、彼の声だけを聞けるだけで嬉しかった。
と、同時に不安になった。
「彼はこのままで大丈夫なのだろうか？」

今となれば、彼の気持ちも痛いほど良くわかる。
不安で、心細くて、誰にもそれを言えなくて、、、。
「周囲は結局ライバル」と構えて、本音を心の奥に閉じ込めてしまう気持ち。
そして、逃げたくなる気持ちも。

ただ、あの頃の私には、それが理解が出来なかった。
本当の彼は、私しか、知らない。本当の彼の姿は、あんな姿ではない。叱咤激励も出来なかった。
。ありのままの彼を受け入れることが大事、と自分に言い聞かせていた。

もしかしたら、彼と本気で向き合うことから逃げていたのは私だったかもしれない。
自分の中で都合のいいシンデレラストoryを作り上げて、
その中だけで、生きていきただけのかもしれない。
結果的に「ブラウン管越しの純粋な球児」じゃない面を、たくさん知ることになった。

私には彼を「否定する」こと、これがどうしても、出来なかった。
神々しくまで見えたあのマウンドでの姿を、心の残像としてずっと
抱え続けてしまっていた。

別の女性と一緒にいるときに私に電話をかけ、キャッキヤという声をBGMに、
「この英文、日本語に訳出来る？『先輩の彼女』が仕事で必要みたいで」と。
後ろで「そんな言い訳じゃバレない？」と無邪気に笑う女性の声が残る。

良く待ち合わせをした横浜駅の西口で、予定より少しだけ早く着いてしまった私が、
知らない女のひとと腕を組んで楽しそうに歩いている彼を見たのも、一度や二度ではない。

電話口で、または面と向かって、
「あの女、誰？」と言えたら、どんなに楽かと思った。

ただ、当時の私は嫌われるのが怖くて、ただただひたすら、耐えていた。
そして、物分りのいい女を演じるので精一杯だった。
彼に嫌われることのほうが、傷つくことよりも何十倍も怖かった。

だから、修羅場になりそうな場面では彼の「友達」
を演じたり、「彼女」のノロケ話を聞いてあげていた。
結局全部、自分が傷つくことが怖かったからだ。

あの夏の甲子園のマウンドにいた彼と、
私はもう一度会える日が来るのだろうか？と、そんなことばかり考えていた。

あの頃の私が一言「私だけを見て欲しい」と言えていたら、
何か変わっていただろうか？

現実

新たな年度が始まり、私は高校三年生になっていた。
嫌が応でもついて回る「受験」という言葉。
勿論私も例外ではなく、気が向かないのに机に向かう日々が続いた。

彼とは相変わらずの関係で、
シーズンインしてからは、さすがに飲み歩く回数も減ったようだが、
初めての遠征、試合帯同で疲れも溜まっているみたいだった。

ある晩、「今から出て来れない？」と、
夜10時過ぎに電話があった。遠征の宿泊場所は、私の家から電車で30分くらいのところ。
行けない距離ではない。

けれども、あまりに急だったのと、
今までの不満や不安が一気に押し寄せてきて、
出会ってから初めて「無理。行けない」と断った。

その言葉を発した瞬間「ああ、もう無理だ。嫌われた」
と、一気に不安が押し寄せてきた。
ただ、予想に反して返ってきた言葉が
「そうか。ごめんな、いつも」だった。
消え入るような声で、彼は続けた。
「お前に甘えてしまってる自分が嫌い」と。

何故かその一言を聞いただけで、
自分のこの数カ月の不安が全て払しょくされた気がした。
「やっぱりこれが本当の彼なんだ。普段は強がっているだけなんだ」と。

「おやすみ。練習頑張ってるね」と言って電話を切り窓の外を見ると、
暑い夏の季節の到来を思わせる、むっとした空気が窓から吹き込んできた。
気がついたらもう、あの暑い夏から1年近く経っていた。

進路選択

夏期講習に通い、受験生らしいふりをしながらその内実は全く勉強に集中できていない。ただ、彼の住んでいる場所に近い大学に行きたくて、そこを志望校にしていた。親からは「国立にすればいいのに」と言われたが、私にとってのプライオリティは、全く違っていた。

しかしとある日、知り合いのスポーツ記者と彼とご飯を食べているとき、「プロ野球選手と結婚すると、スポーツ紙には奥さんのプロフィールが載るから国立大学在学とかだと、結構注目されるんじゃない？」と、冗談めいて言われた。ただ、この一言で私の志望校は、国立大学になった。

そのくらい、私の生活におけるすべての判断軸は彼に寄っていた。彼が好きな音楽やご飯やお酒やタバコや香水や、、、会えない時は、愛煙のタバコに火をつけて、その匂いをかいで過ごした。彼以上に好きになる人なんて出てこない、そう思っていた。

気がついたころには窓の外の風は秋の匂いがし始めていた。その年の甲子園の決勝の終わった日、事件が起きた。

ずっと体がだるいなあ、と思っていた。

今まで夏バテなんて、したこともなかったけれど、受験生でストレスもあるし、受験勉強なんてしてなかったくせに、それが原因かなあ、と思っていた。

1年前を懐かしく思い出しながら、

家族みんなで居間で、甲子園の決勝の名シーンのニュースを見ているとき、突然激しい吐き気に襲われた。

トイレにかけこみ、胃液だけがひたすら押し寄せてくるような

今までに体験したことがない気持ち悪さを抱えて、ずっと鍵をかけてこもっていた。

ふいに不安が頭をよぎった。

「まさか、、、？」

その日は不安を抱えながら眠りにつき、

翌朝、知り合いに会わないように、となるべく遠くの薬局まで自転車を走らせ、レジに向かった。

とても蒸し暑い日だったが、全く汗をかいていなかった。

セミが遠くのほうで、鳴いていた。近くの大型スーパーに駆け込み、トイレを探し当て、妊娠検査薬を袋から取り出した。

それからの10分の待ち時間が、10日のように思えた。

結果は、、、陽性だった。

目にしみるような太陽の光が憎たらしくて、途方にくれながら帰宅した。

悪戯

気が狂いそうな気持ちと同じくらい、怖いくらい冷静な自分がいた。

「これで彼の本当の気持ちがわかるはずだ」

あまりに独りよがりで悪魔のような自分に驚きつつも、これが素直な気持ちだった。

「なんて切り出そう？」「どんな反応をするかな？」と、そんなことばかり考えていた。
母親失格だ。

1年前は電話の着信音がただけで心臓が飛び出していたのに、なんという変化だろう。

2日後に横浜にあるホテルで待ち合わせをしていた。

いつもなら1Fの喫茶店で待ち合わせをするのに、

その日は珍しく、朝方メールで「直接部屋に来て」と呼ばれた。

「お昼の12時に」とのことだったので、11時50分に横浜駅に着く電車に乗った。

まだ夏の日差しが残る、暑い一日だった。

エレベーターを上がり、1809号室のドアをノックした。

すると中から少し甲高い「はい？どなた？」という声が聞こえた。

目の前が真っ暗になった。

混乱してしまい、その場から逃げ去ることも忘れていた。

扉が少しだけ開き、隙間から差し込む逆光でもハッキリとわかる、

目鼻立ちの整った女性の顔が、中から覗いた。

お互いしばしの沈黙の後、奥から「誰？」という彼の声につき、

状況を察し、焦った様子の彼が入口の方に向かってきているのがわかった。

こんな状況なのに、私は泣くことも叫ぶことも怒ることも出来なかった。

静かに扉が開き、顔面蒼白の彼の顔が私を出迎えてくれた。

その時初めて、私の目から大粒の涙がこぼれ落ちた。

けれど、やはり声を出すことは出来なかった。

この時すでに、私はあらゆる感情を失っていたのかもしれない。

あのホテルでの出来事は、今でも断片的にしか思い出せない。
泣き叫ぶ女の人をなだめる彼を、冷めた視線で見つめる私。
私よりも10歳以上年上のその女性は、彼と結婚をすると信じて疑っていない様子だった。
とてもではないが、私の話を切りだせる雰囲気ではなかった。

私がいると、話がややこしくなるだろうと思い、
「今日はもう帰ります。」とだけ言い残し、ホテルを後にした。
二人がこのあとどうなるか、だいたい想像がついたが、
少なくとも、あの場にいるよりは、マシだと思った。

このまま帰るか、どこかに寄ろうか迷っていた瞬間、下腹部を激痛が襲った。
立ち上がることもままならない程の痛みに、周囲の人が手を貸してくれ、近くの病院に搬送された。
親にも連絡出来ないし、あの状態の彼に連絡することも憚られた。

幸か不幸か、搬送された病院に彼の先輩の彼女が勤めていたため、
彼に連絡がいき、先ほどホテルのドアをあけたとき以上に蒼白しきった顔で
病室に駆け込んできた時、外はもうすっかり夕方だった。

「何故すぐに言わなかったのか」と初めて見る、恐ろしい剣幕の顔で言われた。
でも、そんな言葉も、その言葉に続く謝罪の言葉も、いつもだったら心打たれるような優しい言葉も、
全てが映画のセリフを聞いているかのように、ただ耳の中に入っただけだった。
何も感じなかった。

あの日、1年前の夏に甲子園で見せた涙とは全く違う種類の涙を、
今年はお互い同じ場所で一緒に流していた。

なんて皮肉なんだろう。

この日は一年前、初めて彼から電話がかかってきた、まさにその日だった。

人は、なんてないものねだりなのだろう。

手に入るまでは、手に入ることが最大の幸せだと思いこみ、

手に入れば、手に入る前の状況を懐かしく思い出す。

もし、神様がいるならば、私は1年前の夏に戻りたかった。

お医者さんに「大事をとって一泊なさってください」と言われたので
その日は友達に親に連絡をしてもらい、その子の家に泊まることにしてもらった。

病室で、二人で色んな話をした。

私が初めて甲子園で彼を見たときのこと。

彼が私に電話をかけようと思ったときのこと。

初めて会う前に、死ぬほどドキドキしていたこと。

ずっと、私が彼に正直な気持ちを伝えられていなかったこと。

彼が弱いところをみせたくないから、と強がってしまっていたこと。

こんなにちゃんと話したのは初めてだったかもしれない。

一緒に病室に泊まってくれた彼が寝る直前にポツリと言った一言。

「こんな俺だけど、これからも一緒に居てくれる？」

涙を見られなくなかったので、寝たふりをした。

本当に久しぶりに、ぐっすり眠りにつくことが出来た。

少しの間だけだったけれどお腹にいてくれた我が子に、感謝した。

「ありがとう。そして、こんなお母さんでごめんね」と。

今でもたまに思うことがある。

あの日、あの事件が起きずに、あの子がこの世に産まれてきてくれていたら？

自責の念だけは、いつまで経っても消えない。

絶頂

この事件以来、彼は別人のように変わってしまった。

いや、「本来の彼がやっと姿を現した」というほうが正確だ、と思いたい。

休みの前日以外はお酒さえ飲まず、タバコも控え、マメに連絡をくれるようになった。

幸せだった。

秋も深まり、そろそろ冬の気配が漂うころ、

彼と行きつけの中華料理屋でご飯を食べていた。

彼はいつでも、何故か餃子にだけ酢をかけすぎて後悔しちゃう、そんなところも好きだった。

彼が急に切り出した。

「結婚したい。今すぐは無理やと思うけど、大学入学してから時期をちゃんと考えよう」

私は言葉が出なかった。

嬉しすぎて、現実だと思えなくて、このまま時間が止まってしまえばいいのに。

そう本気で思った。

「うん」

目に涙をためて返事し、その日は有頂天で帰宅した。

それからは、何気ない毎日も全てがバラ色に見えた。

それなのに、、、めでたしめでたし、で終わらないのが私たちの運命のようだ。

いつになったら本当の幸せに辿りつけるんだろう？

週に一度の彼のオフに合わせて、受験勉強を必死に頑張った。

「浪人なんてしちゃったら、結婚話が先送りになってしまうかも、、」という不安からだった。そう、変わらず私は、彼が全てにおいての一番のプライオリティだった。

とあるオフの日、デパートに入るとたまたまやっていた
ブライダルフェアの展示に引き込まれ、冷やかしの気持ちで彼の前で何着か試着してみた。
ところが1着、私のために作られたのでは？と思えるようなものに出会えた。

彼も同じことを思ったみたいで、その瞬間店員さんに

「これをください」と頼んでいた。

さすがに店員さんもびっくりしていた。

「これ以上幸せになったら困るな〜」

なんて、少女マンガのセリフのようなことを思いながら店を出て、喫茶店に入った。

彼が先輩と電話するために席を離れた瞬間（とき）背後から気配を感じた。

ホテルで遭遇した、あの女性だった。

顔が殺気立っていた。

あの事件以来、二人ともあの女性のことを話題にしたことはなかった。

だから、どうなっているかも知らなかったし、

今の私にはもはやどうでもいいことだった。

「あのメール、私が送ったの。聞いた？」彼女は少し笑いながら言った。

状況が理解出来なかった。しかしふと、思い出した。

いつもなら喫茶店で待ち合わせをするのに、あの日に限って

直接部屋に呼ばれたことを...

彼女は捲し立て続けた。

「鉢合わせして、どっちを選ぶか、試したかったんだよね。

まあ、あんたが妊娠してたのは想定外だったけど。

でもそのおかげで今彼はあんたといるんだから、あんたにとったらラッキーだったね。

私と別れるときに『子供の件がなかったら、お前を選んだ。ごめん』

って言ってたよ？流産したんだってね。ほんとに妊娠してたの？

彼優しいから、きっと罪悪感からか同情してやってるんだと思うよ。

ま、頑張って」と嘲笑しながら離れていった。

誰を信じたらいいのか、わからなくなっていた。

また、幸せが目の前から逃げていく。

遠くに見えるドアから、彼が笑いながら戻ってくるのが見えた。

偶然

笑顔で席まで戻ってきた彼の顔をまじまじと見ると

「なんかあった？」と無邪気な笑顔で言われたので

私もつい「いや、なんもないよ。先輩と話せた？」と返してしまった。

「あ～それがなあ、今日の夕飯・・・」彼の言葉も耳に入ってこなくなっていた。

さっきの出来事は忘れることにしよう。

今日たまたま、あの女とこの喫茶店で遭遇してしまったから

あんな話を聞かされただけだ。

「ただの偶然だ」と前までの私なら割り切っていたはずだ。

「偶然」、、、、。

この1年の私の身に起こったことの果たして

どれだけが「必然」だったろうか？

ほとんどが「偶然」から始まった気がする。

「偶然」彼の投げている試合を私が見たこと。

「偶然」私の手紙がファンレターの束の一番上にあったこと。

「偶然」、、、、、、、

「運命」と思いたかったけれど、その自信がなかった。

1時間前までは純白のドレスを前に

有頂天だったのに、たった数分の出来事で

奈落の底に突き落とされた気分だった。

彼に気づかれないように、と

その日は努めて明るくふるまった。

あんまり美味しくなかったパスタさえ「美味しい美味しい」と

笑いながら、無理矢理胃に押し込んだ。

「子供の件がなかったら、お前を選んだ」

この言葉がずっと頭の中を支配していた。

帰り道、涙が止まらなかった。

あの女にそんなセリフを吐いたかもしれない彼も

あんな女の言ったことを、彼の言葉よりも信じてしまう自分にも腹がたってしょうがなかった。

電車の窓の外を見ると、粉雪が舞っていた。

残像

連絡は、私から絶っていた。

あの喫茶店での事件以来どうしても彼を信じることができず、
会っていてもあの言葉が頭の中でリフレインする日々。
彼も何かを察してか、「何かあった？」と執拗に問い詰めてくる。

でも、言えなかった。

「あなたを信じていない」ということを突き付けてしまうようで。
今思えば本末転倒な接し方さえも、
あの当時の不器用だったあたしは、それが最善の答えだと思っていた。

1週間が過ぎ、2週間が過ぎ、、、
電話やメールがきても、出たい気持ちを抑えて
ひたすら無視を決め込んだ。

そんな状態だったのに、いざ勉強に行き詰ると、
「今回合格しないと、また思うように会えない1年が始まってしまう」
と自分を追い込んだ。

結局、彼のことはずっと大好きだった。
思い返してみると、辛いことのほうが多かったような気さえするのに
決まって思い出すのは、二人で笑いながら過ごしていた瞬間だった。

人はなんて弱いのだろう。
楽しい時は、その瞬間に身を委ね、
辛い時には、楽しかった瞬間の残像を思い出し、その思い出を生きる。

今、あの暑い夏の日に戻れるのなら
私はどうするだろうか？
考えても、答えは出なかった。

戻りたいのか、戻りたくないのか
それさえもわからなくなっていた。

別れ

出会った当初、私と彼が約束したことがあった。

-----「これからお互い離れ離れになることがあっても、
最初に電話で話したあの日から10年後に、このホテルの喫茶店で会おう」-----

約束した当時は、離れたくなかったし、10年後の自分なんて、とても想像出来なかった。

「彼と一緒にいる瞬間」が私にとって全てだった。
ただ今思うと、この約束をした瞬間から、別れへのカウントダウンが始まっていたのかもしれない。

事件以来深まってしまった溝は
結局最後まで埋めることが出来なかった。
別れは、大学に合格した直後に待っていた。

彼も私も限界だった。
お互い、若すぎたのかもしれない。
お互い、思いやりが足りなかったのかもしれない。

いや、最大の原因は最後まで彼と「一人の人間」として
接することが出来なかった、私のせいだ。
いつまでも彼は私の「憧れ」だった。

「憧れ」がふとした瞬間から「現実」になったとき
人は二つの感情を抱く。
「喜び」と「恐れ」。

いつか、憧れが手の中からすり抜けて
どこかに消えていってしまうかもしれないという恐怖。
私には、この「恐れ」を拭い去ることが最後まで出来なかった。

最後の別れの言葉は、皮肉にも二人とも一緒だった。
「10年後に会えるといいね」
目に涙を溜めて耐える私を、彼は優しく見送ってくれた。
「ありがとう」という一言とともに、、、

あれから、どれだけの年月が経っただろうか。

気がついたら私は26歳になっていた。

あれから10年、またあの暑い夏を思わせる季節がやってきた。

惑

10年の間、甲子園の季節になるたびに少しだけ心が締め付けられた。
けれども、そんな気持ちも徐々に時間が薄らげてくれた。
ある意味それは残酷で、ある意味大きな救いだった。

大学生活を楽しみ、気が付いたら社会人になっていた。
それなりに恋愛もしたし、仕事も充実していた。楽しい毎日だった。
けれども、ふとした瞬間に得体のしれない不思議な感覚が押し寄せてくることがあった。

すれ違う人があの香水をつけているとき、
一緒に飲んだ人があの煙草を吸っているとき、
よく待ち合わせをした駅を通過するとき、、、。

そして、新聞やテレビで彼の名前を見かけたとき、、、。
そんな時はいつも飛び上るほど嬉しかった。
どんな小さい記事でも何度も何度も読み直した。

いつも心のどこかで、あの約束のことを想っていた。
毎年毎年あの日が来るたびに、カウントダウンをしていた。
あと8年、、あと5年、、あと2年、、あと、、、

気がついたら10年経っていた。
ずっと行くべきかどうか悩んでいた。
決心がつかなかった。

けれども、このチャンスを逃したら二度と会えないかもしれない。
会えるかどうかの保証すら全くないのに、
どんな顔で会いに行けばいいのか、わからなかった。

何より、会ってしまったら自分がまたあの頃のようにになってしまうのでは、と怖くて仕方がなかった。

運命

電車に乗り込む瞬間の緊張は、
あの初めて会ったときよりも大きかったかもしれない。
前夜まで悩んだ。

でも、ここで行かなかっただら一生後悔すると思った。
--- この10年、自分が築きあげてきたものが崩れ去ったとしても？ ---
崩れ去ったとしても、後悔したくなかった。
もうこんな自分とはサヨナラしたかった。

普段の10倍くらいの時間をかけて支度をし、
鞆の中に、遙か昔にお揃いで買ったブレスレットをお守り代わりに忍ばせた。
昨夜、段ボールの奥底から探し出したものだ。とっくに色褪せていた。

「なんて挨拶しよう？」
「あたしのことわかるかな？」
「彼は変わっているかな？」

何より、会えるのかどうか不安だった。
時間も決めていない待ち合わせ。
何年も連絡をとっていないのに、会えるはずがなかった。

よっぽど「運命」じゃなければ。

長年使うことを憚っていた言葉が
ストン、と自分の中に入ってきた。そうだ。
「運命」だったら会えるはずだ。

「偶然」はもう起らないはずだから。

ぐっと体に力を入れたると同時に、ホテルの自動ドアが開いた。
ここからは、私の「意思」だ。もう、あの頃の私じゃない。
喫茶店に向かい、今までにない落ち着いた気持ちで席に座った。

ふと見上げた時計は、午前10時を指していた。

待

駅がよく見える、窓際の席に案内された。
ちょうど、フロントも良く見渡せる位置だった。
満面の笑みで接してくれるウエイトレスに、

「ホットコーヒーを。ブラックで」

と無愛想に伝えながら手元のバッグを握りしめ、
力を込め過ぎたその手は、少し汗ばんでいた。
ふと、遠い昔の出来事が頭をよぎった。

同じように、レストランでウエイトレスに
無愛想に受け答えをした私を
彼は厳しく叱ってくれた。

そうだった。
別に野球なんかしていなくたって、
そんなところも含めて、すべて大好きだった。

何故か、ふと安心して緊張がほぐれてソファに沈みこんだ。
次第に、「もう会えないだろう」という気持ちが強くなり
「お昼にはここを出よう」と決めた。

時計の針は11時を過ぎていた。
後1時間で、この10年に終止符が打たれる。
「私は何を望んでいるのだろうか？」

10年経ってもなお、私は答えを出せずにいた。

道

ホテルのドアの開く音がするたびに、
条件反射で入り口を見てしまう。
時計の針は一向に進む気配を見せない。

何杯、コーヒーをおかわりしたろう。
「会えるわけないよな」と嘲笑しながらお会計のために手を挙げた、
まさにその瞬間だった。

急に私の周りが真空状態になり、
五感をすべて奪われたような感覚に襲われた。
フロントの従業員が、ゆっくりと私のほうに向かって歩いてきた。

あからさま過ぎるくらい笑顔で「お客様に」と白い、折りたたまれた紙を渡された。

その紙には短く

「1809号室にいます。
待っています」

と少し他人行儀に走り書きしてあった。
ただ、まぎれもなくそれは、久しぶりに見る彼の筆跡だった。

手が小刻みに震えた。

私は、あの辿ってきた道を、また戻っていくのだろうか？

気が付いたら、足はエレベーターに向かっていた。

再会

階ごとの間隔が、何十分のように感じた。

足の震えが止まらなかった。

「悪戯だったらどうしよう」なんて、そんなことを考えながら、、、、

息を大きく吸って、拳を握りしめてノックした。

一瞬の沈黙の後、

「どうぞ」という、聞きなれたような、
懐かしいような、あの声が耳に届いた。

ドアノブを回し、少し軋む音をたてながら
扉が開くと、残暑厳しい太陽の逆光の中に
ずっとずっと、誰よりも会いたかった、あの姿があった。

声が出なかった。

その場に立ちすくんでしまった。

涙が次から次へと、こみあげては溢れ出てきた。

力なく床に座り込んだ私を、彼のあの懐かしい、
少しくぐもった、暖かい声が迎えてくれた。

「忘れてなかったよな。俺も、これだけは覚えてたわ」

彼の大きい掌で頭を撫でられた私はまた、瞬く間に高校生に戻ってしまった。

「わかったから、もう泣くな」

このまま、時間が止まればいいのに、

このまま、すべてが終わってしまえばいいのに。

涙をぬぐいながら、本気でそう思った。

とりとめのない会話を少し続けただろうか。

私はまだ夢の中にいた。

自分がここにいることが信じられなかった。

ふと思い出したように彼がたちあがり、冷蔵庫をあけ、

「はい。お前飯食べんと、夏はこればかり食べてたよな」

と、私が昔大好きだったアイスを取り出して言った。

こんな一言で十分だった。

涙でくしゃくしゃの顔で笑いながらお礼を言い、

冷蔵庫を覗くと、同じアイスが山のように入っていた。

「未だに夏に、コンビニでこれ見るとお前思い出すから、

こっちついて、最初にコンビニ駆けずり回って買った。いた。

最近置いてないところ多いもんなあ。あの頃はどこにでもあったのに」

最後の一言をポツンと言ってから、

黙り込んでしまった。

そうか。私だけじゃなかったんだ。

今まで、

自分だけが苦しい思いをして、

自分だけが傷ついて、

自分だけが落ち込んで、

自分だけが大好きすぎて、

自分だけが、、、、

そっと彼の隣に腰をかけ、

どちらからともなく手を握って、

何も話さずに、どれだけ時間が経っただろう。

アイスが、手の中で溶けていた。

それでもずっとこのまま、手をつないでいたかった。

けれども、握り合ったお互いの手が

昔とは少しだけ感覚も間隔も違うのを、
きっと二人とも感じていた。

それが、10年という歳月だった。
出会うのが早すぎて、
再会するのが遅すぎた。

それが、二人の「運命」だった。

きっとあと少しだけ、何かが足りなかったんだ。
どちらかが悪かったわけではない。

ホテルの窓から街を見下ろしながら、とりとめのない話をした。
お互いの現在（いま）については、何も尋ねなかったし、何も話さなかった。
そんなことをしても、意味がないことだとお互いわかっていた。

今度こそ、二人とも笑いながら言えた。
ずっと言いたかった「ありがとう」を。
そして、ずっと避けていた、「さようなら」を。

ホテルを出た時、まだ日は高く
蝉がこの夏の最後の仕事とばかりに、声の限り鳴いていた。
私は暑い夏の日、最後に最高の夢を見ることが出来た。

「お互いの痛みも、お互いの苦しきも
そして何より、お互いの幸せを分け合って生きていければ」
そう願った何時かのあの日から。

その願いが叶わなかった私に訪れた最高のご褒美だった。

もう道に迷うことはない。
後ろを振り向くこともない。
前に進んで行くだけだ。

遠い未来に、最後に交わした約束を現実にするためにも。

(完)